義太夫

恩愛・柳の精

後八・三〇　卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

北面の武士横曾根兵衛の子、平太郎は熊野權現に詣でた際、山中の柳の大木が鷹狩の人々によつて伐り倒されようとする所に來り會し柳の難を救うたが、柳の精はその恩に感じて美人と化し平太郎の妻となつて一子、緑丸を生んだ、一方都では後白河法皇の御惱重く、ある夜「御前生の髑髏岩田川の柳の根に止まる、その髑髏を求め、その柳の大木を以て棟堂を御建立あらば怨恨忽ち平癒すべし」との靈夢により、柳伐採の院宣が下つたので平太郎の妻お柳は最愛の夫と子とに別れねばならなくなつた「平太郎住家の段」はこの離別を寫した物語である

淨るり　竹本叶太夫
三味線　鶴澤友遊
ツレ彈　鶴澤友太郎

お柳は平太郎と緑丸とが寢ついたを幸ひに、ひそかに別れを告げ立去ろうとすると平太郎は夢うつつにお柳の述懷を耳にして起上り引止めたが、折からの風につれ伐木の音丁々と聞え來るので、お柳はこれまでなりと後白河法皇御前生の髑髏を夫に渡し、これを手柄に出世あれといひ殘して妻を消す平太郎は緑丸を連れ、あとを慕うて柳の本へ——

その留守に和田四郎が强盜に押入り佛壇の髑髏を奪はんとして、支へる老婆を池中へ投込むゝ折柄立歸つた平太郎はこの有樣に驚き、母を救ひ上げて蘇生させる、再び和田四郎が現れ、奪へる髑髏の因緣を詰問する、平太郎は母の仇を報いんとすれども夜言のことゝて意の如くならず、詮方なく涙にくれてお柳を呼び髑髏を祈ると怒ちまち兩眼明かとなり雖なく和田四郎を討取る

やがて伐り倒された柳の大木は曳けども押せども一寸も動かなかつたが平太郎と緑丸が出て鋸を取ると不思議や苦もなく動き出す、平太郎は木遣音頭をうたつて引いて行く

——柳お精の柳（卅三間堂棟由來）——